

## 連鎖と潜在力～美濃加茂市民ミュージアムの10年とこれから

可 児 光 生

今年度はこんな出来事があった。

秋に行われた「芸術と自然」をテーマとした現代美術ワークショップ事業「Calling 木藤純子展」でのことである。展示室の空間を一つの作品としてみせる手法で作られたインスタレーションが発表された。ウォールケースには白いキューブの展示台と森で拾い集めた木の葉や枝が置かれ、時折風が吹く仕掛けとなっていた。風は常に吹くわけではないし、その風で葉が大きく舞うことはない。微かな風に葉はかさかさとして揺れるだけであった。照明を落とした展示室は暗く、立ち止まることもなく足早に過ぎる大人たちが多くいた。そんな中、森へ学習にきた子どもたちは、すぐに葉が揺れているのを見つけた。「動いてる」と言って足を止めたのである。

もう一つは、9月初旬に開催した早稲田大学の劇団がやってきたときのこまでである。当市は坪内逍遙の生誕の地であるという縁から、早稲田大学の劇団による学生演劇を昨年度から開催している。公演日の数日前から学生には滞在してもらい、舞台の現場となる森や芝生で仕上げの練習を行う。今年のシナリオは「山月記」。舞踏をふんだんに盛り込んだ躍動感のある演劇であった。その日は休日であったためか、館内には家族連れが多かった。しかも雨天のため、練習はエントランスホールで行われていた。そのホールに、足を止め学生の動きに見入っている子どもがいたのである。親はその手を引いて連れて行こうとするのに、子どもは全く動こうとしない。次第に親もあきらめた。

どちらも印象的な光景であった。子どもたちは、大人には理解できない何かを確かに感じていたのである。何を見て、何に惹かれ、どのように感じていたのだろうか。もしかして大人になって失ってしまった感性が子どもたちの中で働いていたのかもしれない。

五感を通して人に伝える、ということは昔から当然のようにいわれてきた。しかしこの二つの出来事は、ミュージアムは何かを感じるための五感を研ぎ澄ますきっかけを与えられる場所であると改めて気付かせてくれたのである。

では、鋭敏な感性を失ってしまった、何かを感じることができない人はどうしたらよいのか。何かに見入って感動している人々をみて、何を感じているのか、なぜ感じるのか、それを考えてみればよいのではないのだろうかと思った。この連鎖が生まれたとき、影響は果てしなく広がるだろう。それはミュージアムの潜在的な力である。

また、今年の冬には「ていねいな暮らしのあったころ」という企画展を開催し、美濃加茂市伊深町の民俗学者・佐野一彦が、昭和の伊深の日常風景を撮影した写真を紹介した(\*1)。単に懐かしさを伝えるものではなく、そういった時代があったこと、行きすぎてしまっている自分たちの今の身の回りの生活をちょっと立ち止まって考えてもらえたらという思いがあった。



「子どもの水あそび」(昭和43年) 佐野一彦撮影

その中の1枚に、地域に流れる川をせき止めて自然のプールをつくり、中で子どもたちが遊ぶ様子が写されているものがあつた。天然のプールには、そこへ降りるための道や階段などは当然なく、

代わりにはしごが掛けられていた。写真を見た当初は、はしごは夏の間じゅう置きっぱなしにしてあるものだと思いこんでいた。しかし聞き取りにより、毎日地域の大人たちが朝用意をして夕方にしてしまっていたのだと知った。はしごは大切な家財であったため、そうしたとのことであった。写真の中には大人の姿はどこにも見あたらない。恐らく今であれば、その周りに四六時中保護者が付き添うことだろう。当然ながら、当時の大人たちは農作業や家事で忙しく、子どもをみている余裕もなかった。しかし、だからといって当時の人々が子どもに愛情がなかったわけではない。親の子を見守る気持ちは、はしごに表れており、はしごを通して子どもたちを見守っていたのである。

この一枚の写真から、来場者のうち何人の人がそのことに気づいてくれたかどうかは分からない。まして解説にもそこまで詳しく説明をしていない。一枚の写真の展示が親子の関係や教育、地域を考える一つの材料となったように感じられた。そしてミュージアムとは、こうした一枚の写真、一つの資料から新しい見方やその背景、地域の問題や現代の課題を提示する場ではないかと思った。

こうしたごく最近の出来事によって、ミュージアムが来館者の五感をとぎすます場でありうること、展示が新しい見方を提示する場であることに気付かされたのである。そしてそうした二つの動きこそが、新しい価値観を見いだしたり、つくりあげたりすること（いわゆる「文化」）につながるのだと。振り返ってみるとこのことは、これからのミュージアムに求められている方向性であると改めて感じる。

## ミュージアムと人の力

2010年、みのかも文化の森は開館して10年を迎える。1983年に建設基金が設置され、施設の建設の意思表示がされてから18年を経過し、2000年10月にオープンした（\*2）。

### ①自然との共存

「みのかも文化の森」には、9ヘクタールの敷地に里山としての豊かな森があります。この森と、その「たたずまい」を、子どもも大人も「体感」できる場でありたいと考えて

います。人が自然から学ぶことの大事さ、得られるものの大きさをあらためて考えてみたいと思います。

### ②学校教育との連携

「みのかも文化の森」は自然の中に立地し、地域の文化的、歴史的資料が収集展示されている施設です。学芸員やボランティアなど人的資源もそなえられています。そのような素材や条件を生かし、様々な体験学習や深まりのある学習が可能となります。モノからそして人から学んだ子どもたちが、将来文化を支える人々になることを願っています。

### ③市民参画

「みのかも文化の森」では、ボランティアのみなさんをはじめとして多くの市民の方々が森の活動を支えます。館の事業への協力や参加にとどまらず、自由な発想と自発的な気持ちで活動に参画する、そんな協働しておこなう新しい取り組みや企画は館の新しい力となって次へつながっていきます。

### ④地域づくり

「みのかも文化の森」は、いわゆる「博物館」や「教育・文化」といった限られた枠にとらわれず、ふだんの生活の一部として利用され、地域の様々な人々の交流の場となることをめざしています。活動をとおして「文化力」を徐々に蓄積し、社会的存在として地域の中で機能していかなければならないと思います。

準備段階でこの4つの理念を築き、それを意識しながら活動してきたこの10年を振り返ってみて、一番に感じているのは人の力についてである。当初、想定しなかったような動きがあったことも事実である。

文化の森には、日々子どもたちが授業のためにやってくる。いわゆるミュージアムでの学習ということで、子供たちが実物から感じることによる学習効果は最初からある程度予測されたことであった。予想しなかったことは、ミュージアムの「場」や「空気」に大きな学習効果あるということ、そしてもう一つは子どもたち自身がボランティアや学習に関わる「人」の存在に気づき、影響をうけていることであった（\*3）。

竹とんぼを作る学習のなかで、ある子どもは竹とんぼを作り飛ばしたことよりも、途中で怪我をして手を痛めながらも作り続けてくれたボランティアの姿に感動していた。自らの問いかけにより、ボランティアが無償で働いていることを知った子どもたちは、とても驚いていた。そうしたボラン

ティアの生き方、関わり方について、子どもたちは自ら気づき、色々なことを感じ、考えている。こうした人々との時間は、彼らの将来を考えるヒントになっている気がするのである。

ボランティアは、博物館と来館者の間に立つ存在である。そうした市民の声を通して伝えていくことは、館側から直接に伝えるよりも大きな力となる。「人から学ぶ」こと、「人を通して学ぶ」ことの重要性を感じている。様々な市民活動、ボランティア、人々の動きや発想は無尽蔵で次へつながりゆくものである。館として目に見えないが、とても大きな財産であり潜在的な力だと思う。

一方で、ミュージアム業務を進める上で支えていてくれる館外の人々の存在がある。研究者、作家、他館の関係者、そんな人々との関係の蓄積とネットワークの広がり、現在のミュージアムの大きな力となっていて、相互の信頼関係が築かれつつあるのを実感している。やはりミュージアムは人と人とで作りあげられている。

ミュージアムの学芸員とスタッフの力もあった。地域ミュージアムとしてこれまで色々な企画をしてきたが、いわゆる展覧会はパッケージ化された企画をほとんど実施せず、学芸員による独自のアイデアと発想のことが多い。手作りので見栄えのよくないものも多いのかもしれないが、いずれも現在までの研究成果や社会の動向を見据え、地域のこと、市民のこと、自然のことを考えながら取り組んでいるものばかりであると自負している。地域の文化の特性を見いだそうと掘り下げる企画がすすめられていること、その方向はこれからも一貫して行っていかなければならないものだと思う。同じテーマを扱うにしても、見方や切り口が変わればまた新しい発見がそこにはある。「次はこうきたか」と言われるようなものが続けられるといいと思う。幸いにこのミュージアムは分野が広い。自然、歴史、民俗、美術、人物など、それらの分野を組み合わせテーマを設定することも他館にはできないことである。厳しい予算の中で、この特徴をもっと生かしていく必要がある。

## これからのこと

では、現在とこれからの課題はどうか。先ほどミュージアムに関わる様々な人々について言及したが、ミュージアムはボランティアをはじめとして、朗読に関する団体、人物顕彰や自然研究の団体など様々な市民と共に在る。その関係について改めて考えてみると、お互いに主体性を持ち社会的に成熟した団体、関係となっていくことが望ましいだろう。そのためにはそれぞれが依存的な関係ではなく、互いに責任感をもって発想を出し合っていかなければならない。さらに発展し創造的な動きができるよう、この10年で作られた信頼関係をもとに対話しながら行動をすすめていきたいと思う。同じ目線で、同じ目的を共有したい。

次には、ここでの企画や活動が地域の様々な活動に波及し、発展することによる新しい動きを生み出しているかどうかを考えていく必要がある。館の独りよがりの、自己満足に終わっていないか、社会的な連鎖があるかどうかを絶えず検証していくことが求められるだろう。例えば、朗読講座から生まれた団体が活動や指導の場を学校や地域に広げ一定の効果が認められること、伝承料理の会が作ったレシピ集『おばあちゃんちのおかって』が次々に売れ増刷を重ねているということ(\*4)、現代美術の展示が旧中山道の街の動きに採りいれられようとしていること、「ていねいな暮らしのあった頃」の展示活動が伊深のコミュニティーづくりの組織に影響を与えたことなど、この地域との関わりや波及が見られるのはいいことである。



『おばあちゃんちのおかって』（2002年～2006年）

2010年4月から、美濃加茂市民ミュージアム（文化振興課）は教育委員会部局から市長部局（市民協働部）への移管が行われることになっている。文化は人々と街を生き生きとさせる大きな力を持っているという発想を大切に、市民とともに協働して進めていく方法を重視していこうという意味での転換である。

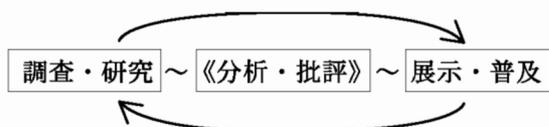
しかし、思えば、館の設立当初から4つめの理念として「地域づくり」という意識を持ち続けてきた。10年前の段階ですでにこの館の目指すべき方向として提示していたものが、今の時点でようやく市のねらうものと一致・連動したかのようと思われるのである。いわゆる「博物館」「美術館」といった枠にとらわれず、地域のことを考え、人々が集まり新しい発想で物事が行われること、そしてそのことが周りの人に広がり、次の世代へつながることになる、地域ミュージアムとしてそんな役割を果たすこと、館の力を生かすことができればいいと思う。

### 分析・批評と交流、自由

新しい価値観を創出する場であること、博物館と人の関係、博物館と地域のこと、これまでの10年を省みて、これからの10年のミュージアムの活動についてすこし考えてみたい。

ミュージアムは様々な意味で、蓄積の場である。資料や作品といった「もの」としての蓄積もあれば、調査研究の実績、そして人やネットワークの蓄積もある。この蓄積を生かすと、展示普及といった活動へとつながる。また利用者側にも、鑑賞者の知識や知的好奇心の蓄積がある。ミュージアムは鑑賞者や利用者が自らを表現する場となり、創造的な活動が生まれる。

ミュージアムの調査・研究の蓄積が展示・普及という活動を起こし、また逆に展示・普及活動が新たな研究領域を作り出す。その繰り返しの中には、当事者とともに第三者による分析・批評といった過程が必ず必要である。



また、利用者側では、鑑賞や蓄積が新たな表現や創作活動を活発にする。ここで重要なことは、蓄積と表現が繰り返される中に生まれる人と人との「交流」であると思う。交流が深まれば表現創作も深まる。



ミュージアムと利用者、それぞれの行動の行き交いの「間」に現れる分析・批評や、育まれる人の交流を意識して活動をしていくことが大事であると考え（\*5）。

そして今思うことは、相互の分析・批評、人の交流といった「間」の活動が実現されるには、既成の概念から解き放たれた自由な空気が常にあるのが、すべての前提だということである。

2007年度から夏の1ヶ月、ミュージアムでは「まゆの家当番」というものを行っている。森の中にある復元した養蚕家屋・生活体験館で、全職員が半日単位で交替して事務所で日常的な業務から離れ、一人まゆの家で時間を過ごす。パソコンは無し、電話は取り次がない。来館者の対応のかたわら、セミの鳴き声と風鈴の音を聞き、座敷を渡る真夏の風を感じる。心を解放した時間のなかで、それまでの振り返りが行われ、次への新しい着想が生まれると信じている。

ミュージアムの利用者もスタッフも自由で柔軟な発想をもち、心を解放して接し考えることが大切なのである。ありがたいことにこのミュージアムは9ヘクタールという広い森の中に立地している。恵まれた自然という「場」と「空間」自体が人々の気持ちを自由にさせる力を持っている。

（かに みつお 美濃加茂市民ミュージアム館長）

- (\* 1) 美濃加茂市民ミュージアム『ていねいな暮らしのあったころ』(2009年)
- (\* 2) 可児光生「何をめざそうとしていたか～市民ミュージアム設立までの17年」(『美濃加茂市民ミュージアム紀要』第1号、2001年)
- (\* 3) 同「美濃加茂市民ミュージアムの博学連携活動」(『瑞浪市化石博物館研究報告』No.35、2009年)
- (\* 4) 同「人からまなぶ、こころを伝える」(『ミュゼ』No.81、2007年)
- (\* 5) 中川幾郎『新市民時代の文化行政』(公人の友社、1995年) 参照